
ヴァンパイアとお姫様

ARI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴァンパイアとお姫様

【Zコード】

NZ8389L

【作者名】

ARI

【あらすじ】

オールト国。

そこは平和で豊かな国だった。

争いもなく、ただ平穏に毎日が過ぎていった。

だが、この時既に私の運命は決まっていたのかもしれない。

ヴァンパイアの出現。

狙われる姫。

崩れゆく平和。

運命の歯車は、狂い始める。

始まり

騒々しい朝の出来事。

「お待ち下さい。姫様。」

今日で私は18歳、この国では成人にあたるからめでたい日ではあるけれど…

儀式とかなんとかで、正装しなくてはならない。

それがまた面倒だ。

「いやよ。私、そんなもの付けたくないわ。」

「ですが、姫様。」

「アイラ姫。」

「ヴァン…?…どうして、ソーラー…?」

ヴァン・ルージ。

ルージ家は代々、私の家の護衛をすることになつていて、私のボディガード。

「廊下まで聞こえますよ。一体、どうしたんですか?」

「…別に、なんでもないわ。」

彼はため息をつきながら、ふとメイドがもつっていた髪飾りに視線が

とある。

「姫、飾りはきちんと付けないとけませんよ。」

ヴァンはメイドが持っていた髪飾りをもじり、アイラに近付いた。

「いやよ。そんな重いもの。」

アイラはぱふっと横を向く。

ヴァンは再びため息をついた。

姫のわがままはいつものことだが、少しばかし姫との直感をもつてほしい。

「ダメですよ。ちゃんと付けて下せ。」

「いや。」

「…姫。」

「…。」

ヴァンの低い声が私の耳に届いた。

「姫に似合いますよ、この髪飾り。これを付けた姫を見てみたいものです。」

「…。」

「姫、付けて下さー。」

私はじつこつ時、ヴァンに弱い。

「本当に、似合つ?」

アイラは上目でヴァンを見た。

「はい。とっても。」

「…わかった。付けるわ。」

私はヴァンが好きだから、じつこつヴァンのお願いには断れない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8389/>

ヴァンパイアとお姫様

2010年12月10日01時18分発行